相模川流域における宮ノ台式期の集落

――その時空間的展開の素描――

安　藤　広　道

1．はじめに
2．相模川流域における宮ノ台式期の遺跡とその時間的変遷
3．鶴見川・早渕川流域との比較から見た相模川流域の遺跡群動態の特徴
4．おわりに

1．はじめに

神奈川県の中央を南北に流れる相模川は，流域面積1,687km²の関東地方有数の大河川である。その下流域には，隣接する金目川水系を含めた広大な沖積平野が広がり，それを臨む台地上・微高地上に数多くの弥生時代遺跡の存在が知られている。近年では，県東部の発掘件数が落ちつきを見せてきたこともあって，県央部・県西部に注目すべき調査成果が目立っているが，中でも相模川流域における弥生時代遺跡の調査事例の増加は目覚ましく，その成果を踏まえた議論・研究も，ますます活発化の状況を呈してきている（神奈川県考古学会1997）。

相模川流域と言えば，従来より弥生時代後期の集落が圧倒的に多いことが強調されている地域である（西川1991）。その傾向は，近年に至っても変わるところはなく，それどころか調査例の進展とともに益々顕著になっているようにも見える。また，全国的に注目を集めた綾瀬市神崎遺跡をはじめとして，東海地方との密接な関連を示す集落遺跡の調査が相次いだこともあり，相模川流域の弥生時代研究は，いつしか後期を中心に進められることになったのである。

しかしながら，この間，華々しい後期遺跡の調査成果の陰に隠れがちではあるものの，1986・1987年の秦野市砂田台遺跡の調査を皮切りとして，宮ノ台式期の調査事例が着実に増加していたことも見逃すわけにはいかないのである。

砂田台遺跡の調査が，相模川流域における宮ノ台式期研究の大きな転機になったことは間違いない。砂田台遺跡の調査は，それまで集落の実態が不明であった相模川流域に，鶴見川・早渕川流域と同様の大規模な環濠集落が存在していたことを明らかにしただけでなく，141軒に及ぶ住居址をはじめとする遺構群，そして土器・石器・金属器・炭化種子類などの多彩な遺物の発見によって，当地域の資料的不備を一気に解消したのである。

砂田台遺跡を中心とした宮ノ台式期研究は，報告書における宍戸信悟氏の土器・集落の分析に始まった（神奈川県立埋蔵文化財センター1991）。その後，筆者の相模湾沿岸地域の宮ノ台式土器の細分（安藤1991），宍戸信悟氏による土器分析の再展開（宍戸1992），黒沢　浩氏の砂

田台遺跡出土土器の分析など（黒沢1993），土器の細分を中心とした研究が相次ぐことになる。また，編年以外でも，砂田台遺跡出土土器を主たる分析対象とした研究が増えており（飯塚1996），豊富な出土量を誇る石器や鉄器に言及した研究も蓄積されてきた（石川1993・安藤1997）。決して盛んと言える状況ではないが，砂田台遺跡の調査を契機としたこのような研究によって，相模川流域における宮ノ台式期研究は，着実に前進をしてきたのである。

このような中，集落や集落群を対象とする研究が目立たなかった点については，周囲の集落遺跡の調査が進展していなかった状況を鑑みれば，致し方ないことだったと言えるかも知れない。しかし，最近の宮ノ台式期遺跡の調査事例の増加は，小規模な調査が多いとは言え，以前のような砂田台遺跡の一人舞台の状況を大きく変えつつある。これまでの土器編年をはじめとする遺物研究の成果を受けとめ，その上に立って集落や集落群の問題を議論できる土俵が，ここにきてようやく整ってきたわけである。

筆者は以前より，東京湾西岸地域の鶴見川・早渕川流域や大岡川流域の宮ノ台式期集落群を研究対象としてきたが，その中で，東京湾西岸地域内部の検討のみでは解決できない数多くの問題に直面することになった。例えば，鶴見川・早渕川流域の集落群の形成は，無人の地における突如とした大規模環濠集落群の出現に特徴づけられるが，そこでは少なくとも500人以上の集団の移住を想定せざるを得ないことが指摘できた（安藤1991b・95）。また，石器・鉄器の分析においては，太形蛤刃石斧や抉入片刃石斧の大半が製品として鶴見川・早渕川流域へ持ち込まれていること，そして少なからず普及していたと推測される鉄器の存在から，宮ノ台式期の集団の生活維持に，地域間交流が不可欠であったことを指摘し得た（安藤1997）。つまり，宮ノ台式期の集落群の検討には，どうしても広い範囲を見渡した地域相互の詳細な関係の追求が要求されるわけである。特に集団移住の問題では，土器の様相や地理的な距離関係からしても，その故地は相模湾沿岸地域のどこかであった可能性が高いと考えており，その意味においても，相模川流域を無視することは不可能になってきたのである。

筆者はこれまで，鶴見川・早渕川流域における宮ノ台式期集落群の形成・展開・廃絶の各過程が，あくまで南関東地方，あるいはそれを越える広い範囲で生じた大きな変化の一局面にすぎないことにも注意を促してきたつもりである（安藤1991b）。同じ東京湾西岸の大岡川流域の集落群でさえ，その展開過程に差異が見られたように（安藤1992），筆者は，鶴見川・早渕川流域の集落群の展開過程を典型例とし，それによって南関東地方各地の集落群の展開を全て説明し尽くすなど到底不可能と考えている。後述のように，相模川流域の集落群の展開も，幾つかの共通点を持ちながら，鶴見川・早渕川流域とはかなり異なった過程を経ていたと考えざるを得ない。その意味では，宮ノ台式期に南関東地方各地で生じた文化的・社会的変化の実態は，未だほとんど明らかにされていないと言ってもよいのである。

「宮ノ台式期弥生文化」成立の謎に迫るためには，広い地域を見渡した上での，個々の地域の分析と地域相互の関連性の追求が，今後ますます重要になることは疑いない。

2．相模川流域における宮ノ台式期の遺跡とその時間的変遷

（1）遺跡の集成

相模川流域には，管見に触れた範囲でおよそ40ヶ所の遺跡が発見・調査されている。遺跡の立地は，台地・丘陵・砂丘・自然堤防とバラエティーに富んでいるが，2，3の例外を除き，河川氾濫原あるいは広めの谷底低地に面する点においては，強い共通性が認められるようである。以下では，これらのうち，発掘調査のなされた遺跡と，未発掘であっても採集資料の時期の検討ができる遺跡を集成し，個々の遺跡の形成時期や集落形態の特徴を概観したうえで，その時間的変遷をまとめておきたいと思う。なお時期区分に関しては，筆者の相模湾沿岸地域（Sa地域）における細分案（6期区分・安藤1991a）を用いることにする。

・相模川西岸・金目川水系

①山ノ上遺跡［厚木市及川］（神奈川県教育委員会1988）

相模川の支流，荻野川に面した荻野台地上に立地する。中期後半の住居址が1軒検出されているが，出土土器が中部高地系のものに限られているため明確な時期決定は困難である。ただし，遺構外から概ねSaⅡ期に相当する宮ノ台式土器が少量出土している。

②子ノ神遺跡［厚木市戸室］（厚木市教育委員会1978・83・90）

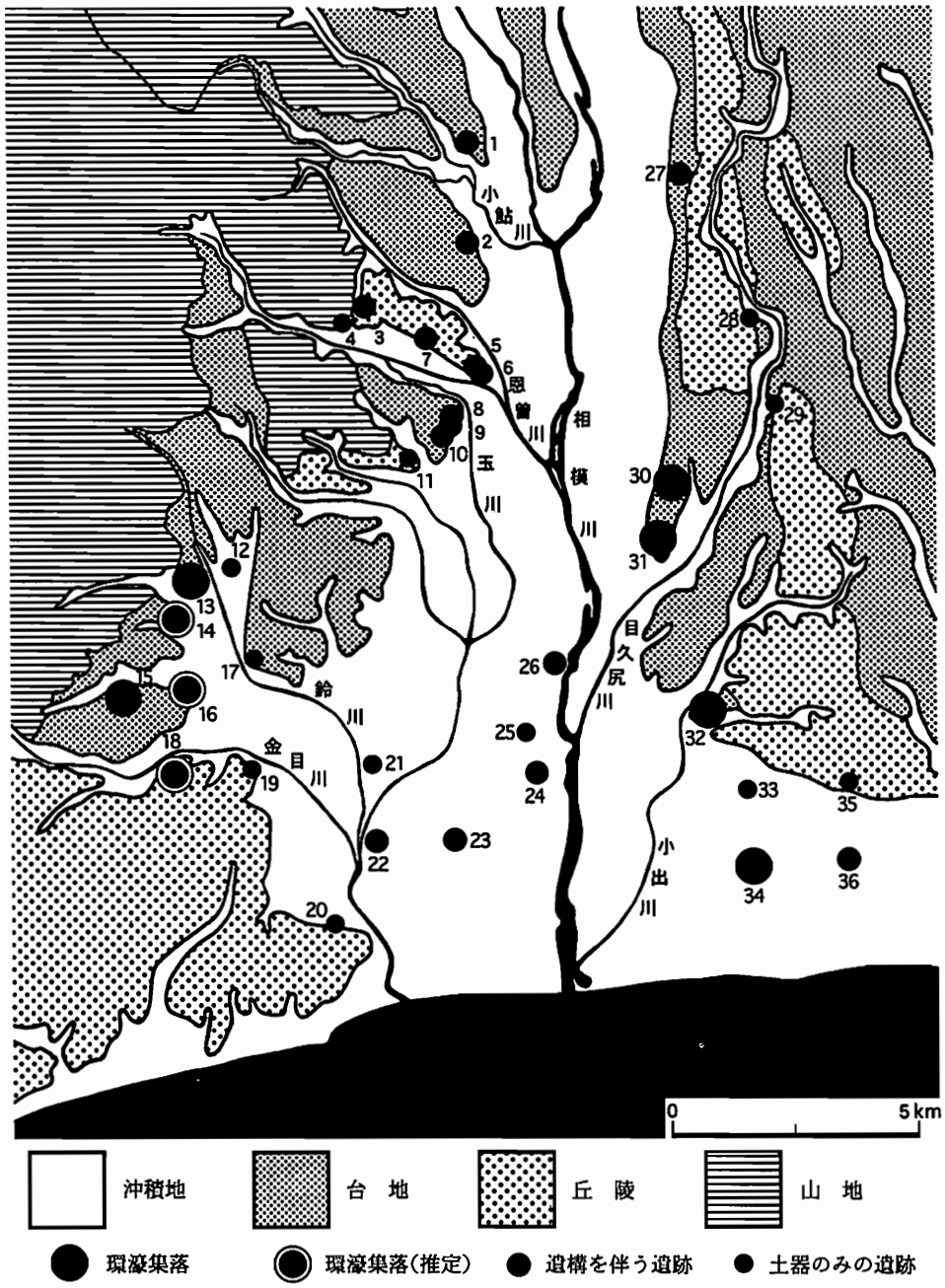
相模川の支流，小鮎川に面した尼寺原台地の北東縁辺に立地する。弥生時代中期から歴史時代の200軒もの住居址が調査されており，その中に数軒の宮ノ台式期初頭の住居址が存在する。資料的にまとまったものは見られないが，内面に多条の鎖状文を有し，口唇部にハケ具による刻みを持つ甕形土器をはじめとして（68号住居址），筆者が宮ノ台式土器の最古段階とした三宅島大里遺跡・坊田遺跡に並行する時期（SaⅠ期）の資料が確実に存在している。また，細かいハケ目上に一本描羽状文を描く甕形土器（68号住居址）や，無区画の細帯縄文を重畳させた壺形土器（57号住居址）などの存在からは，SaⅡ期以降の住居址の存在も予想される。かつて筆者がSaⅠ期の資料として位置づけた12号住居址の細頸壺形土器も，縄文の細かさや沈線の細さからSaⅡ期以降に下るものと考えるようになった。

なお子ノ神遺跡では，SaⅠ期の直前にあたる「須和田式」期あるいは「中里式」期終末の住居址（32号・84号・86号・96号住居址など）が検出されている点も重要である。

③愛名鳥山遺跡［厚木市愛名］（愛名鳥山遺跡発掘調査会1974）

相模川の支流，恩曽川から長谷丘陵内に南に入り込む細長い谷戸に面した舌状台地上に立地する。小さな谷を挟んでA・B2つの地点に分かれ，A地点で4軒，B地点で3軒の宮ノ台式期の住居址が検出されている。各住居址は10m以上の間隔を開けて点在し，建て替えの痕跡を持つものは見られない。

出土土器はそれほど多くないが，両地区とも概ねSaⅡ期に相当するものが主体となるようである。ただし，B地区の住居址から検出されている，ナデ調整の上に「ささら状」の条痕に



1：山ノ上　2：子ノ神　3：愛名鳥山　4：小野川野　5：宮の里　6：宮の前舟子　7：温水長久保地区第1　8：愛甲宮前　9：石田・峰・愛甲宿　10：石田・細谷　11：髙森・赤坂　12：白根　13：宮ノ根　14：根丸島　15：砂田台　16：寺尾　17：赤坂　18：原口　19：五領ヶ台　20：笹本　21：豊田本郷　22：南原B・C　23：大原　24：坪ノ内　25：鹿見堂　26：田村館跡　27：国分尼寺北方　28：宮久保　29：吉岡　30：本郷中谷津　31：倉見才戸　32：西方　33：向原　34：居村A　35：八図　36：宿

第1図　相模川流域における宮ノ台式期の遺跡

よって横羽状文を描く甕形土器（同一個体か？）については，宮ノ台式土器に共伴するものとは考えず，「須和田・中里式」期終末に位置づけられるものとしておきたい。

④ 小野川野遺跡［厚木市小野］（愛名鳥山遺跡発掘調査会1974，厚木市1985）

相模川の支流，新玉川に面した段丘面に立地する。愛名鳥山遺跡とはごく近い位置関係になる。明確な遺構は検出されていないが，内面に多条の鎖状文を有し口唇部にハケ刻みを持つ甕形土器や，粗い縄文を太い沈線で区画した意匠文を持つ壺形土器などが検出されており，これらはSa Ⅰ期に遡るものと考えてよい。また中には「ささら状」条痕や，口唇上端の弱い押捺を有する甕形土器などが見られ，「須和田・中里式」期終末のものも存在するようである。

⑤ 宮の里遺跡［厚木市舟子］（浅川・他1988）

恩曽川と新玉川に挟まれた長谷丘陵の先端部に立地する。主体となる弥生時代後期の住居址群に埋もれるように，宮ノ台式期の住居址が4軒検出されている。環濠を持たない小規模な集落と考えられる。出土土器が公表されていないため，時期は不明である。

⑥ 宮の前舟子遺跡［厚木市舟子］（中村1997）

宮の里遺跡に隣接し，丘陵のより先端に位置する。宮ノ台式期の方形周溝墓が4基検出されている。ただし集落の位置は不明である。出土土器の一部が公表されているが，内面に多条の鎖状文，外面に密な横羽状文を有する甕形土器や，太い沈線で区画された結紐文を持つ壺形土器など，Sa Ⅰ期に遡り得る内容を有している点が注目される。

⑦ 温水長久保地区遺跡群第1地区［厚木市長谷］（迫1996）

長谷丘陵の南部，宮の里遺跡と小野川野遺跡の間に位置する。中期の住居址の検出が報じられているが，詳細は不明である。

⑧ 愛甲宮前遺跡［厚木市愛甲］（愛甲宮前遺跡第2地区発掘調査団1994）

愛甲台地の南東端に位置する。古墳時代・平安時代の遺構群の間から宮ノ台式期の溝状遺構が検出されている。方形周溝墓となる可能性が考えられるものの断定はできない。土器は，遺跡全体で僅かに出土したのみであるが，一本描・櫛描の羽状文を有する甕形土器や，口縁部・頸部に羽状縄文帯を持つ壺形土器が見られ，SaⅢ～Ⅵ期の時間幅を持つ可能性がある。

⑨ 石田・峯遺跡・愛甲宿遺跡［伊勢原市石田・厚木市愛甲］（立花1995，林原1996）

愛甲台地の南端に位置する。中期の方形周溝墓と溝状遺構の検出が報じられているが，詳細は不明である。

⑩ 石田・細谷遺跡［伊勢原市石田］（中村1992）

愛甲台地の南端，愛甲宮前遺跡の南西に位置する。約1,000㎡の調査範囲から宮ノ台式期の住居址が1軒検出されたと言う。ただし出土遺物が少なく，調査者は断定を控えている。

⑪ 高森・赤坂遺跡［伊勢原市高森］（立花1992）

高森丘陵の南端に位置する。中期の土器の出土が報じられているが詳細は不明である。

⑫ 白根遺跡［伊勢原市白根］（愛名鳥山遺跡発掘調査会1974）

金目川水系，鈴川が形成する山王原扇状地の末端部分に位置する。弥生時代中期の遺物が採集された地点は，採集当時沼地であったと言われている。採集された土器は，羽状縄文を持つ壺形土器，外面ハケ調整，口縁部指頭押捺の甕形土器が主体となっており，また櫛描沈線による区画を持つものが見られるなど，SaⅣ～Ⅵ期の時間幅を与えることができそうである。他に大陸系磨製石斧や木製品も出土している。

⑬ **宮ノ根遺跡**［伊勢原市串橋］（高橋1993）

舌状に張り出した山王原扇状地の末端に位置する。弥生時代中期の環濠2条と住居址3軒の検出が報じられているが，時期や規模等の詳細は不明である。

⑭ **根丸島遺跡**［秦野市根丸島］（根丸島遺跡調査団1976，秦野市1985，西相模考古学会1987・88）

金目川水系の善波川・大根川に挟まれた低い台地上に立地する。25,000㎡に及ぶ台地上のほぼ全面が調査され，弥生時代中期から平安時代までの住居址701軒が検出されている。公表された情報が少なく，中期の住居址の数や分布は不明であるが，これまで断片的に公開されてきた資料によって，出土土器の大まかな様相を窺うことができる。公開された資料の中には，202号住居址出土土器のような確実にSaⅢ期に遡るものが存在するほか，289号住居址・295号住居址でSaⅣ期のものが，275号住居址・291号住居址でSaⅤ・Ⅵ期の土器がそれぞれ出土している。SaⅢ期以降，継続的に集落が営まれていた可能性が高い。

なお，根丸島遺跡では，遺跡の中央や西側で，環濠に類した溝状遺構が検出されている点も注目される。これらの溝が全て弥生時代のものであるとは言い切れないが，溝の走り方や公開された断面の写真などを見る限りでは，環濠になるものが含まれていることは間違いない。その内の何条かが宮ノ台式期に遡る可能性を期待しておきたい。

⑮ **砂田台遺跡**［秦野市南矢名］（神奈川県立埋蔵文化財センター1989・91）

大根川の谷底低地に面した北金目台地上に立地する。約10,000㎡の調査範囲から141軒に及ぶ住居址と2条の環濠が検出された。出土土器には，確実にSaⅡ期のものが存在しているが，住居址に重複が多いこともあって，該期の良好な一括資料は見られない。ただ4号溝と呼ばれる内側の環濠の覆土下層からも，内面鎖状文を持つ甕形土器などSaⅡ期に遡る土器が出土しており，鶴見川・早渕川流域と同様に，集落形成の初期から環濠が掘削されていたことが窺われる。なお4号溝からは，後続するSaⅢ期の資料も多量に出土している。

一方，SaⅣ～Ⅵ期の資料に関しては，住居址出土土器の中に良好な一括資料が数多く見られるほか，3号溝と呼ばれる外側の環濠や方形周溝墓などからも多量に出土している。集落形成当初から環濠集落として成立し，宮ノ台式期終末まで規模を少しずつ拡大させながら継続した集落の姿が想定される。

⑯ **寺尾遺跡**［平塚市真田］（真田・北金目遺跡調査団1983）

大根川に面した北金目台地上，砂田台遺跡の東方約1kmに位置する。分布確認のための小規模なトレンチ調査が行われ，3ヶ所から中期の土器が出土している。擬似流水文を持つ壺形土

器や外面に櫛描・一本描羽状文を有する甕形土器などの存在から，集落の形成時期がSaⅢ期以前に遡ることは確実である。SaⅡ期に遡る可能性も捨てきれない。また，やや離れた地点から単独で出土した，太い沈線で区画された王字文を持つ壺形土器破片は，SaⅠ期のものである可能性もある。一方で，頸部に羽状縄文を有し，無文部が赤彩された壺形土器など，SaⅣ期以降に下る土器も目立っている。

なお，寺尾遺跡に西接する真田城跡遺跡では，宮ノ台式期の溝状遺構の検出が報じられている（田尾1992）。詳細は不明であるが，寺尾遺跡のトレンチから出土した土器に時間幅があることや，遺跡が広い台地上に立地していることなどを鑑みると，寺尾遺跡近辺に環濠集落が眠っている可能性は，かなり高いように思われる。

⑰赤坂遺跡［平塚市岡崎］（平塚市博物館1989）

伊勢原台地の南西端，金目川水系の鈴川・板戸川に面した場所に位置する。小規模な調査範囲から少量の宮ノ台式土器と石器類が出土している。出土した土器には，櫛描波状文と単斜縄文を組み合わせた文様や擬似流水文を持つ壺形土器破片など，SaⅢ期に遡るものが確実に存在するほか，羽状縄文を持つ土器など，SaⅤ・Ⅵ期に下るものも多い。

⑱原口遺跡［平塚市上吉沢］（㈶かながわ考古学財団1997a）

大磯丘陵の北端，金目川に面した台地上に位置する。弥生時代の遺構の詳細は未報告だが，写真図版が先行して刊行されており，遺跡の概要については知ることができる。調査された遺構のほとんどは後期のものであるが，宮ノ台式期の住居址や溝状遺構，方形周溝墓なども検出されている。YH71号とされた住居址から，SaⅢ期の資料がまとまって出土しているほか，Y6号溝からSaⅡ～Ⅳ期以降の時間幅のある破片が出土している。また谷部には宮ノ台式期終末のものと思われる土器も見られる。既報告分の発掘成果表には，中期環濠集落という記載もあり，調査範囲の外側に概期の環濠集落の主体が眠っているものと思われる。

⑲五領ヶ台遺跡［平塚市広川］（小島1985）

大磯丘陵の北東端に位置する。工事の際に出土した壺形土器が報告されている。頸部と胴部に一本描沈線を付加した幅広縄文帯を持つもので，SaⅢあるいはⅣ期の土器と考えられる。

⑳笹本遺跡［平塚市山下］（平塚市博物館1980）

大磯丘陵の東端に近い扇状地に立地する遺跡である。完形の広口壺形土器と底部を欠損した中部高地系土器，及び宮ノ台式土器の破片数点が採集されている。広口壺形土器は，1本描波状文の付加された，1本描沈線区画の舌状文を2段有する。区画する沈線の太さや付加された波状文から，SaⅡ期に遡る可能性があるものと捉えておく。

・平塚砂丘地域

㉑豊田本郷遺跡［平塚市豊田本郷］（豊田本郷遺跡発掘調査団1985）

金目川水系鈴川の形成する自然堤防上に立地する。概期の遺構は検出されていないものの，古代・中世の遺構から宮ノ台式土器が出土している。櫛描擬似流水文や一本描沈線区画意匠文

の壺形土器，内面鎖状文・外面羽状文の甕形土器など，SaⅡ期のものが中心になっているようである。というより，確実にSaⅢ期以降と考えられる土器が見られないと言ったほうが正確かも知れない。また，一本描沈線による擬似流水文の壺形土器，多条鎖状文や胴部磨消線文（伊藤1996）を持つ甕形土器など，SaⅠ期に遡る可能性のある土器の存在も注目される。

㉒ 南原B・C遺跡［平塚市南原］（平塚市博物館1980，平塚市遺跡調査会1992・93a・b・96）

金目川水系渋田川と鈴川の合流点に面した平塚3列砂丘の西端に立地する。これまで数度の調査が行われ，それぞれの調査地点から少量の宮ノ台式土器が出土している。B遺跡第4地点では中期の集落の検出が報じられており，第1地点でも宮ノ台式期の溝状遺構が検出されている。また，第3地点で出土したイノシシの下顎骨も注目される。C地点と合わせ比較的広い範囲に宮ノ台式期の活動の痕跡が残されているようである。

報告された土器は多くはないが，壺形土器の文様には櫛描の擬似流水文や直線文，細かい波状文を持つ破片が目立ち，一本描・二本描沈線区画の意匠文，幅広縄文帯に沈線を付加したものなどが散見される。SaⅡ～Ⅲ期の資料が中心になっていると考えてよかろう。

㉓ 大原遺跡［平塚市大原］（平塚市遺跡調査会1989a）

平塚砂丘の北半中央，4・5列砂丘帯間の低地に面した5列砂丘上に立地する。宮ノ台式期の住居址2軒と溝状遺構が検出されている。櫛描擬似流水文の下端に振幅の大きな波状文を加えたものや，一本描波状文を付加した幅広縄文帯を有する壺形土器の存在，甕形土器にハケ具による口唇部装飾が目立つ点などから，出土土器の大半はSaⅢ期と考えてよさそうである。なお，家形土器を出土したSI03住居址は，報告を見る限り住居址内出土土器の中に確実な宮ノ台式土器が見あたらないため，とりあえず該期の遺構としては扱わないことにする。

㉔ 坪ノ内遺跡［平塚市四ノ宮］（平塚市遺跡調査会1989b）

平塚砂丘の北東端に位置する。宮ノ台式期の方形周溝墓が検出され，溝内から壺棺と思われる大形の壺形土器が出土している。胴部上半に最大径を持つことや，細い一本描沈線区画の結紐文，無文部のハケ目などの特徴から，SaⅢ期のものと考えたい。

㉕ 鹿見堂遺跡［平塚市四ノ宮］（神奈川県1979）

平塚砂丘の北東端，坪ノ内遺跡の北方，相模川の自然堤防と接する地点に位置する。完形の壺形土器が1点採集されている。頸部から胴部上半にかけ櫛描直線文で上下を区画した細かい波状文帯が描かれたもので，SaⅡあるいはⅢ期の土器と考えられる。

㉖ 田村館跡遺跡［平塚市田村］（田村館跡発掘調査団1995）

鹿見堂遺跡の北側の相模川の自然堤防上に位置する。方形周溝墓の先端部分と考えられる落ち込みが検出され，そこから数個体の土器が出土している。胴部上半に無区画の幅広縄文帯を持つ壺形土器以外には，時期推定の根拠となるものがなく，SaⅣ～Ⅵ期の幅の中で考えざるを得ない。また，遺構外の破片資料の中には，一本描・二本描沈線によって区画された結紐文や，羽状縄文を持つものが見られる。結紐文の個体をSaⅢ期，羽状縄文の個体をSaⅣ期以降

のものとすることも不可能ではないが，一方で，遺構出土の土器群を含めた全ての土器をSaⅣ期の所産と考えることもできる。

・相模川東岸地域

㉗ 国分尼寺北方遺跡［海老名市上今泉］（国分尼寺北方遺跡調査団1996）

高座丘陵と相模川沖積地の間に細く伸びる段丘面に位置する。方形周溝墓が1基検出されているが，単独か群在かは判らない。集落も今のところ不明である。ただし，周囲で数次にわたり行われている国分尼寺の調査で，該期の遺構が発見されていない点からすると，大規模な集落を想定することは難しいかも知れない。溝内からSaⅢ期の壺形土器が1点出土している。

㉘ 宮久保遺跡［綾瀬市早川］（神奈川県立埋蔵文化財センター1987）

目久尻川の上流，座間丘陵の東側扇状地崖錐に位置する。河川に近い地点から宮ノ台式期の壺形土器2点が出土しているが，遺構は発見されていない。ともに無文であり，時期決定の決め手を欠くが，器形や器面調整の特徴から判断すれば，SaⅤ～Ⅵ期とするのが妥当であろう。

㉙ 吉岡遺跡群［綾瀬市吉岡］（㈶かながわ考古学財団1997b）

目久尻川中流の高座丘陵上に位置する。浄水場建設に伴い広大な面積が調査され，宮ノ台式土器と思われる土器破片が12点ほど出土した。ただし，該期の遺構は確認されていない。

㉚ 本郷中谷津遺跡［海老名市本郷］（本郷中谷津遺跡調査団1994）

相模川と目久尻川の支流の中谷津川に挟まれた細長い段丘面に立地する。1,300㎡が調査され，宮ノ台式期の方形周溝墓8基と環濠と思われるⅤ字溝が検出された。集落はⅤ字溝の北西方面に広がっているものと考えられる。方形周溝墓群のみの調査であるため土器の数は少ないが，1号墓からSaⅢ期相当の，4号墓からSaⅣ期と思われる土器群が出土している。

なお，周溝墓群から北北西約250mの位置にある有馬小学校地内で，該期の住居址群と環濠の検出が報じられている（押方1996）。仮にそれが同一集落の環濠だとすれば，比較的規模の大きな集落ということになる。

㉛ 倉見才戸遺跡［寒川町倉見］（木村・田村1992，寒川町1997）

相模川と目久尻川の間に突き出た細長い低位段丘上に立地している。遺跡の西側がすぐ相模川氾濫原になっており，現状で沖積面との比高差はほとんどない。2,000㎡弱の調査範囲全体から宮ノ台式期の住居址18軒が検出された。その後に行われた調査で，宮ノ台式期の環濠が検出されたと言われている（本郷遺跡調査団1995）。

一部公開された土器は，SaⅤ～Ⅵ期のものであるが，住居址の非連続的重複が数ヶ所に認められることからすれば，比較的継続期間の長い集落だったことは間違いない。なお，砂田台遺跡と同様，石器や鉄器が豊富に出土している点も注目される。

㉜ 西方遺跡［茅ヶ崎市下寺尾］（茅ヶ崎市教育委員会1994，茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会1988a・88b）

高座丘陵の南西部，相模川の支流の小出川に向かって突き出た低位段丘面に立地する。小規模な調査が数回行われ，宮ノ台式期の環濠2条と住居址7軒が発見されている。環濠は遺跡の

西端と県立高校を挟んだ北東方面で検出されており，その間は直線距離で約400ｍに達する。また宮ノ台式期の住居址も３ヶ所の調査区全てで見つかっており，宮ノ台式期の遺構の分布範囲は，少なくとも東西400ｍ，南北200ｍ以上に達するものと考えられる。鶴見川・早渕川流域の折本西原遺跡に匹敵する巨大な環濠集落となる可能性が高い。

出土土器は，Ｙ１Ｍとされた内側の環濠や，Ｙ１号住居址からSaⅣ期の資料が検出されているほか，住居址覆土などに混じって，SaⅢ期に遡ると考えられる一本描羽状文を描く甕形土器破片が比較的多く出土している。また遺構外から出土した，内面に鎖状文や押引文を施し，外面に櫛描羽状文を描く甕形土器破片の存在は，集落のはじまりがSaⅠ期にまで遡る可能性を示唆している。ただし，今のところ，SaⅤ・Ⅵ期に下る資料の存在は明確でない。なお，隣接する下寺尾七堂伽藍遺跡からも，宮ノ台式土器が出土しているという（大村1989）。

㉝ **向原遺跡**［茅ヶ崎市香川］（神奈川県立博物館1969）

『考古資料集成１』で「火葬場付近」とされた遺跡である。口縁部に最大径を持ち頸部の不明確な甕形土器が１点出土している。器形をはじめ，ハケ調整後の一本描羽状文，口唇部指頭押捺などの特徴から，SaⅢ期の所産と考えて間違いない。

㉞ **居村Ａ遺跡**［茅ヶ崎市茅ヶ崎］（茅ヶ崎市教育委員会1995，富永1995）

湘南砂丘の第４列から派生する小支丘の先端に位置する。770㎡の小規模な調査区内から，宮ノ台式期の環濠と住居址２軒が検出されたと言う。時期などの詳細は不明であるが，砂丘上にも宮ノ台式期の環濠集落が存在する可能性を示した注目すべき遺跡と言える。

㉟ **八図遺跡**［茅ヶ崎市赤羽根］（神奈川県立博物館1969，茅ヶ崎市1980）

『考古資料集成１』では「中赤羽根」となっているが，『茅ヶ崎市史』によると，中期の土器は，高座丘陵上の八図遺跡で発見されたらしい。中期として紹介された土器の中には，一部後期のものが混じっているものの，SaⅥ期相当の壺形土器・無頸壺形土器も見られる。

㊱ **宿遺跡**（茅ヶ崎市小和田）（富永1997）

中期の住居址の検出が報じられているが，詳細は不明である。

（２）集落群の時間的変遷過程

次に，上記の遺跡の時間的変遷をまとめておくことにするが，多くの遺跡が断片的な調査にとどまっており，また未報告のものも多いため，細かな分析は不可能である。したがって，ここでは大まかな傾向の把握に努めることにしたい。

・**「須和田式・中里式」期終末**（第２図①）

ここで言う「須和田式・中里式」期終末は，子ノ神遺跡32号・84号住居址出土土器を標式とする，磨消意匠文の壺形土器や羽状文の甕形土器に特徴付けられる時期である。筆者のⅠ期の直前にあたり，谷口氏の編年の７期にほぼ該当する（谷口1996）。

この時期の遺跡は，今のところ相模川西岸側のみで発見されており，玉川流域の北側にやや

まとまる傾向が見えるようである。遺構・遺物ともに充実した内容を持つ子ノ神遺跡をはじめとして，小野川野遺跡や原口遺跡において，該期に属することのほぼ確実な資料が出土している。先述のように，愛名鳥山遺跡の土器破片にも，この時期に属する可能性のあるものが存在する。なお，これらの遺跡では，後に宮ノ台式期の集落も形成されており，該期と宮ノ台式期の集落立地に大きな違いがなかったことが窺われる。

・SaⅠ期（第2図②）

SaⅠ期の遺跡は，確実なものとして子ノ神遺跡・小野川野遺跡・宮の里舟子遺跡があるほか，寺尾遺跡，豊田本郷遺跡，西方遺跡からも可能性のある土器破片が出土している。前の時期と同様，遺構を伴う遺跡は少ないが，子ノ神遺跡で住居址が，宮の前舟子遺跡で方形周溝墓が発見されている。特に宮の前舟子遺跡の方形周溝墓は，今のところ相模川流域最古のものであり，それが明確な群構成を取っている点で注目される。

・SaⅡ期（第2図③）

SaⅡ期では遺跡数の増加が顕著となる。この時期には，「須和田式・中里式」期終末期・SaⅠ期の遺跡がまとまる傾向を見せていた中津川と玉川に挟まれた範囲のほか，平塚砂丘と金目川流域での集落遺跡の増加が目立つ。特に注目されるのは，砂田台遺跡の環濠の覆土下層から該期の土器が出土している点で，少なくとも該期の中で環濠集落が成立していたことを物語っている。原口遺跡や寺尾遺跡でも該期中に環濠集落が成立している可能性があり，金目川水系で既に環濠集落が群として成立していることも考えられる。いずれにしても，該期が相模川流域における集落群動態の一つの画期になっていることは間違いないものと思われる。

・SaⅢ期（第2図④）

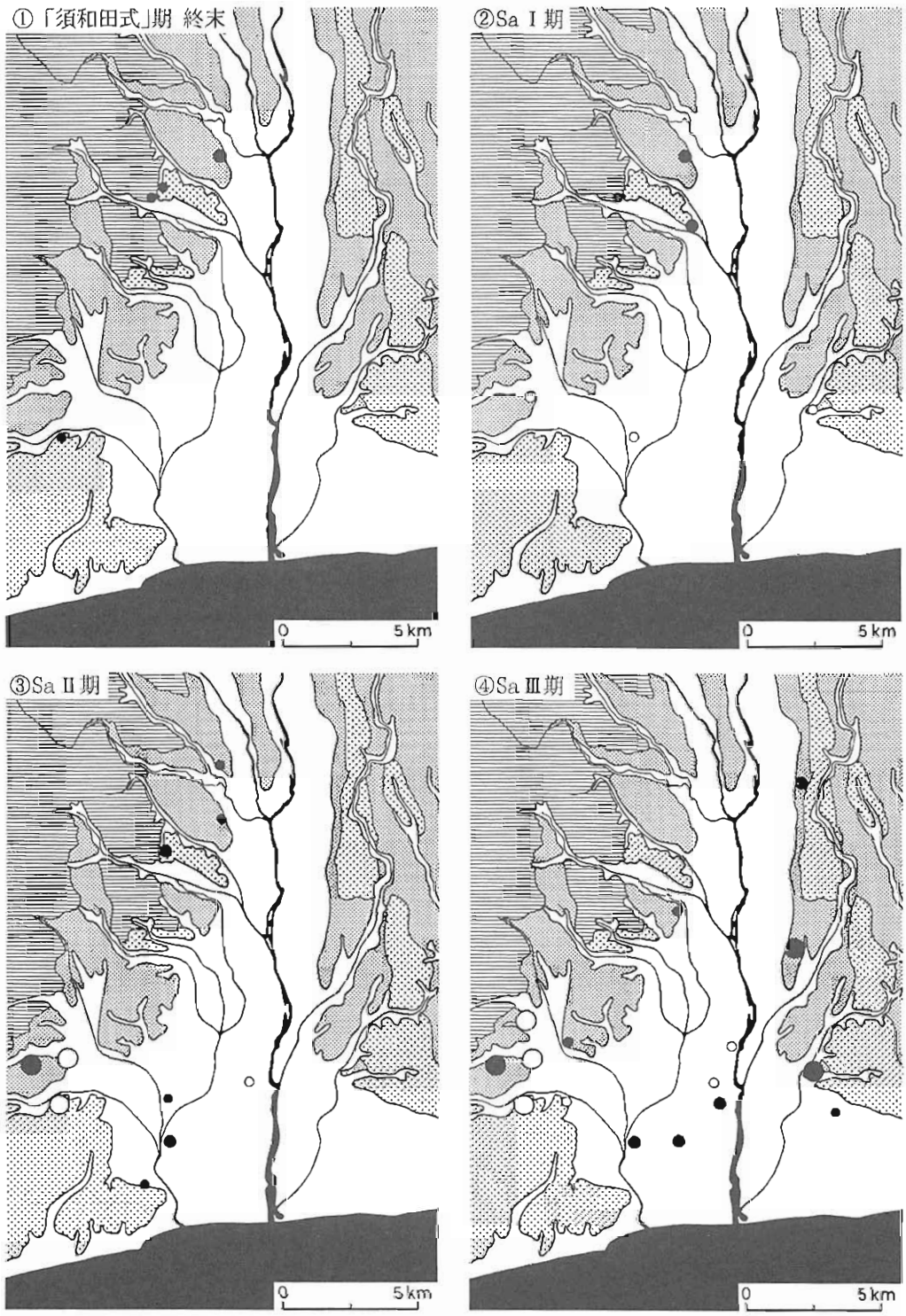
前時期に成立した砂田台遺跡のほか，遅くともこの時期には本郷中谷津遺跡や西方遺跡で環濠集落が形成されていたものと考えられる。そのほか原口遺跡や根丸島遺跡，寺尾遺跡も環濠集落であった可能性が高い。それぞれの集落形態が今一つ明確ではないものの，鈴川・金目川流域と小出川・目久尻川流域の二つの地域に，上記の遺跡を中心にした遺跡のまとまりが形成されつつある点には注目する必要があろう。一方，SaⅡ期までの遺跡がまとまる傾向を見せていた中津川と玉川に挟まれた範囲で遺跡の存在が不明確になる点も興味深い現象である。

・SaⅣ期（第3図⑤）

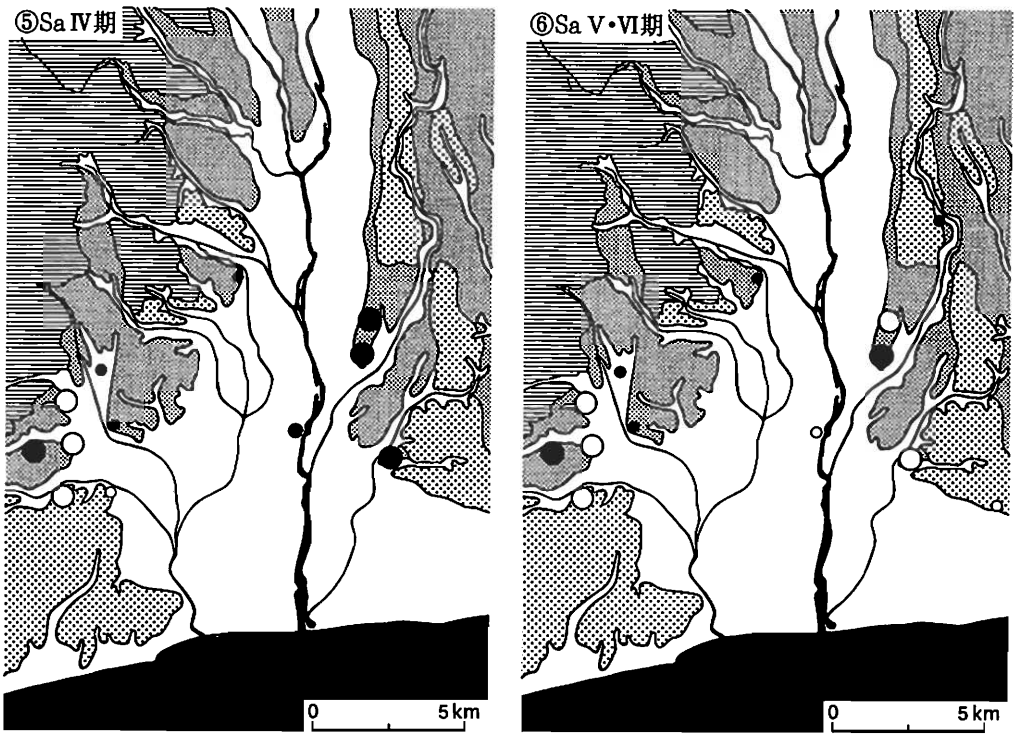
SaⅢ期における二つの環濠集落のまとまりは，SaⅣ期にも継続して見ることができる。また，SaⅢ期と同様，中津川と玉川に挟まれた範囲には明確な遺跡が存在しないようである。なお，SaⅢ期からSaⅣ期にかけての注目すべき変化としては，平塚砂丘上において，田村館跡遺跡を除き，この時期の遺跡が見られなくなることが挙げられる。

・SaⅤ・Ⅵ期（第3図⑥）

SaⅤ・Ⅵ期の遺跡の分布は，基本的にSaⅣ期と変わるところがなさそうである。本郷中谷津遺跡，西方遺跡ではこの時期の土器の存在が今のところ不明確であるが，宮ノ台式期の環濠



第2図　相模川流域における宮ノ台式期の集落群動態①



● 環濠集落　● 遺構を伴う遺跡　● 土器のみの遺跡（白抜きは推定）

第３図　相模川流域における宮ノ台式期の集落群動態②

集落の多くがその終末期まで継続していることからすれば，SaⅤ・Ⅵ期まで継続していた可能性は高いように思われる。なお，前時期と同様，中津川と玉川に挟まれた範囲では，今のところSaⅤ・Ⅵ期の遺跡も確認されていない。平塚砂丘上でも，田村館跡遺跡から概期に属する可能性のある土器が出土しているだけである。この時期の特異な現象としては，目久尻川上流の宮久保遺跡で該期の土器が出土している点が挙げられるが，壺形土器２点が遺構に伴わず出土したものであり，そこで行われた活動の実態は不明である。

３．鶴見川・早渕川流域との比較から見た相模川流域の遺跡群動態の特徴

ここでは，上述の相模川流域の遺跡群の動態に対し，過去に筆者が行ってきた鶴見川・早渕川流域の遺跡群動態との比較を軸に，その特徴をまとめてみることにしたい。同時に，その過程で派生してくる問題点についても，若干の考察を試みておく。

・宮ノ台式期以前の集落の存在をめぐって

相模川流域の遺跡群動態を，鶴見川・早渕川流域のそれに対比させる時，特に際だった相違点として浮かび上がってくるのは，鶴見川・早渕川流域においてほとんど発見されていない「須和田式・中里式」期の遺跡が，複数確認されていることであろう。そもそも相模川西方の

丹沢山麓一帯は，弥生時代前期に遡る及川遺跡をはじめとして，堂山遺跡，平沢同明遺跡，平沢北開戸遺跡など，宮ノ台式期以前の遺跡が比較的多く存在する地域である。これらの遺跡の多くは再葬墓を中心とした墓地の遺跡であるが，宮ノ台式期に近い時期の遺跡には，王子ノ台遺跡や砂田台遺跡，子ノ神遺跡など，竪穴住居址を伴う集落址の存在が明らかになっている。特に子ノ神遺跡は，遺物量もさることながら，まさに宮ノ台式期直前の集落である点が注目される。また，相模川流域では，やはり鶴見川・早渕川流域ではほとんど見られないSaⅠ期の遺跡の存在も確実であり，中には子ノ神遺跡，宮の里舟子遺跡のように竪穴住居址や方形周溝墓群が検出された遺跡もある。

もちろん，「須和田式・中里式」期の遺跡の存在が確実とは言え，未だその数は限られている。しかしながら，遺跡の調査密度がきわめて高く，かつ80ヶ所を越える宮ノ台式期の遺跡の存在が確認されている鶴見川・早渕川流域において，「須和田式・中里式」期終末の1片の土器片すら検出されていない状況，そしてSaⅠ期・Ⅱ期並行期の遺跡も，僅か1・2例が知られるのみである点と比較すれば，数が限られているとは言え，時間的に断絶することなく地域内に遺跡が存在することの意義は大きいと考えざるを得ない。

相模川流域で発見されている「須和田式・中里式」期の遺跡は，これまでのところ，いずれも数軒の竪穴住居址で完結する小規模な集落と考えられるものである。しかし，近年小田原市中里遺跡において「須和田式・中里式」期終末の大規模な方形周溝墓群が発見されていることからすれば（小田原市教育委員会1997），今後相模川流域でも該期の大規模な集落遺跡が発見される可能性は十分に考えられる。いずれにせよ，現在の相模川流域の発掘調査密度を見る限り，今後も該期の遺跡の発見が続くことは間違いなさそうである。

となると，ここでの問題は，「須和田式・中里式」期の遺跡が，その後の相模川流域の宮ノ台式期集落群，特にSaⅡ期以降に展開する環濠集落群の母胎となり得たのか，という点に絞られることになる。遺跡の調査事例自体が限られている現状では，残念ながらこの点を追求するための有効な手がかりを見い出し得ないでいるが，それでも筆者は，該期を通じて生じた土器の変化を概観する限り，その可能性を捨て去るべきではないと考えている。

例えば，東海地方的要素が強いと言われる宮ノ台式土器にも，壺形土器の沈線区画意匠文や施文帯の配置，甕形土器の羽状文や指頭押捺手法などの要素に，相模地域から東海地方東部の「須和田式・中里式」並行期の系譜が残存している状況を見ることが可能である（安藤1990）。また，相模地域の宮ノ台式期初頭の甕形土器に見られる内面櫛目鎖状文は，相模地域の「須和田式・中里式」の系譜である可能性もあり，逆に東海地方東部の甕形土器に特徴的な胴部磨消線文は，ほとんど相模地域に浸透していない。このような点を視野に入れるだけでも，いかに東海地方の影響が大きいとは言え，そこに単純な集団の交代劇を想定することは不可能なように思われるのである。

その意味では，子ノ神遺跡のように「須和田式・中里式」期終末と宮ノ台式期初頭の集落が

同一地点で重なる事例は重要な意味を持つ。また，地域は離れるが，房総半島の常代遺跡や向神納里遺跡では，「須和田式」期から宮ノ台式期にかけて連綿と継続する大規模な方形周溝墓群の存在も明らかになっている（㈶君津郡市文化財センター1995，君津市教育委員会1996）。これらの諸例は，土器様相の変化がいかに大きなものであっても，それが直ちに集落や墓地の消長と結びつくものではないことを物語っているのである。

ただし一方で，筆者には，SaⅠ期またはⅡ期に見られる土器の器形・文様・調整・器種構成に及ぶ西からの強烈な影響の背景に，集団の移動が関与していなかったことを主張し得る根拠があるわけでもない。考古資料から集団の移動・接触の実態を捉えることの難しさに直面して，己の無力さを嘆くばかりであるが，それでも従来の単純な模式化に対する警鐘を鳴らすことはできるだろう。「須和田式・中里式」期から宮ノ台式期にかけての時期には，土器ばかりでなく，集落や墓地の形態，石器組成など，物質文化全体にわたるさまざまな変化が生じていた可能性が高い。今は，集団の移動・接触の問題に取り組むためにも，単純な図式的解釈に陥ることなく，常に全体を見渡すことを念頭に置きながら，まずは一つ一つの変化の実態を詳細に掴むことが必要な時期なのかも知れない。

・環濠集落群の形成過程

先述のように，相模川流域においても，SaⅡ期以降に環濠集落が形成されはじめるが，それ以前から集落が存在する相模川流域では，その形成過程に鶴見川・早渕川流域と異なる部分が見られるのは当然である。

鶴見川・早渕川流域の環濠集落群の場合は，SaⅢ期並行期の集団移住によって成立したと考えられ，その後しばらく，環濠集落主体の集落群構成が維持されていたことが明らかになっている（安藤1991b）。一方，相模川流域では，SaⅡ～Ⅲ期に金目川流域と目久尻川・小出川流域の二つの地域に環濠集落群が形成されるが，この動きと連動するように，その周辺の集落群に変化が生じる点に興味が引かれる。例えば，「須和田式・中里式」期から継続的に集落が営まれていた中津川と玉川に挟まれた範囲では，SaⅡ期を最後に遺跡が見られなくなる。また，平塚砂丘においてもSaⅣ期以降に遺跡が激減する。つまり，環濠集落群の成立と相前後して，隣接地域の集落が廃絶する方向へと向かっているように見えるのである。

この遺跡群の動態には，広域に分散する短期的な小集落が，何らかの契機によって特定地域にまとまり，環濠集落群を形成したとする解釈，または特定地域の人口増加，あるいは他地域からの集団移住によって環濠集落群が形成され，その影響で中津川～玉川・平塚砂丘の集団が，流域から追い出されたとする解釈など，幾つかの解釈の方向性を示すことができそうである。しかし，先述のとおり，集団の継続・断絶を明確に捉える有効な方法を持たない現状では，この点に踏み込むことは難しい。鶴見川・早渕川流域を含めた，他地域の集落群の動向と絡む可能性を帯びた重要な問題だけに，慎重な検討を積み重ねていくことが望まれる。

一方，その実態がいかなるものであっても，相模川流域におけるSaⅡ～Ⅲ期の環濠集落群

の出現は，別の意味で興味深い。それは，相模川流域の環濠集落群形成とほぼ同時かやや遅れて，鶴見川・早渕川流域をはじめとする南関東地方各地に，同様の環濠集落群が多発的・波及的に成立している点である。

もちろん，先述の中里遺跡の大規模な方形周溝墓群，そして常代遺跡や向神納里遺跡の「須和田式」期から宮ノ台式期に継続する方形周溝墓群などの存在は，「須和田式・中里式」期に遡る大規模な集落の存在を予見させるものであるし，その集落が環濠を有していたとしても不思議ではない。しかし，このような「須和田式・中里式」期の環濠集落の存在を想定するにしても，一方で，SaⅡ期並行期よりも古い環濠集落が，宮ノ台式土器分布圏で未だ一例も確認されていないことの持つ意味は，小さくないはずである。少なくとも，環濠集落が群として地域に展開する状況が生じるのは，SaⅡ期並行期以降と考えてよさそうであり，それ以前の環濠集落の存在が，その画期としての意味を失わせることはないと言ってよいだろう。

そのような南関東地方全体に及ぶ集落群構成の変化の中で生じた，鶴見川・早渕川流域への大規模な集団移住，そして相模川流域における分散型の集落群の衰退という現象が，相互に独立したものであったとは考えにくい。その点では，各地で展開する環濠集落群に，集落群の形成過程の違いを問わず，集落群形成時における人口の急増，環濠を巡らす大規模な集落形態の一般化，そして石器や鉄器を中心とした物資の流通網の形成，といった共通の特徴が見られることは，きわめて重要な意味を持つように思われる。何故なら，これらの特徴は，いずれも広域分散型あるいは短期廃絶型とでも言うべき集落構成では対処の困難な，集団間・地域間の新たな関係の成立を予見させるものだからである。

例えば，地域人口の急増は，地域集団内部における新たな社会関係成立の原因，あるいは結果として考えることもできるだろうし，環濠を巡らすという集落形態は，月並みな解釈ではあるが，集団間あるいは地域間の緊張関係の表面化・顕在化の現れである可能性が高い。また，環濠集落群展開以降の集落群が，石器や鉄器の流通に見られたように利器の大半を他地域からの供給に依存していることは，さまざまな物資や情報・人間が流れる地域間の密接な交流関係の形成が，集落群の展開に不可欠であったことを意味している。このような集団間・地域間の依存関係の進展は，それが構造的・制度的な安定性を持たない限り，それぞれの間に，常に対立関係・緊張関係を生み出す危険性をはらむと考えることもできる。その意味では，環濠集落群が見せる地域間の対立性と密接な相互依存性は，決して矛盾した現象ではなく，当時の集団間・地域間の関係が見せる，二つの表情と考えるべきであろう。

このように，鶴見川・早渕川流域への大規模な集団移住，相模川流域における分散型集落群の衰退という現象は，SaⅡ～Ⅲ期並行期に南関東地方の広い範囲で連鎖的に生じた集落群の再編成の地域的な一様相として捉えられる可能性が高い。そしてそこに鉄をはじめとする物資流通の新たな関係が成立していることからすれば，その再編成の背景に，南関東地方という範囲を越えた，より広い地域の動向が深く関与していたことも予想される。いずれにせよ，各地

域の集落群動態の具体相について，個々の地域の中だけで説得力のある解釈を導き出すことは不可能なように思われる。今後は南関東地方全体，あるいは南関東地方を取り巻く，より大きな動向に目を向ける広い視野が要求されることになるはずである。

・環濠集落群の構成

環濠集落群の成立以後の集落群の構成については，環濠集落が主体となるのか，あるいはこれに環濠を持たない集落が組み合わさるのか，調査例自体が限られている現状で判断することは危険かもしれない。ただし，今のところSaⅣ期以降に下る環濠を持たない小規模な集落の確実な例が知られていないことも確かであり，少なくともSaⅣ期並行期以降の鶴見川・早渕川流域に顕著な，小規模集落の急増という現象は生じていなかった可能性が高い。また，遺構の埋没深度の違いがあるにしても，分布調査で数十ヶ所の宮ノ台式期の遺物散布地が確認された鶴見川・早渕川流域に対し，分布調査段階における散布地の発見率があまりにも少ない点が気にかかるし，他の時期・時代の遺跡の調査で，偶然概期の集落が発見されることも決して多いとは言えない。このような点を見る限りでは，やはり環濠集落の周囲に小規模な集落が多数存在する集落群構成を想定することは難しそうである。一方で，環濠の存在が確認された遺跡の方は着実に増加しており，遅くともⅢ期以降は，人口の大半が環濠集落内に居住していた可能性が高いものと考えておきたい。筆者は以前，鶴見川・早渕川流域の小規模集落の急増について，河川氾濫原の狭さという地理的条件が深く関わっているとの見解を述べたことがあったが（安藤1991b），広大な沖積地を持つ相模川流域における小規模な集落の少なさは，この点を傍証するものとも考えられよう。

ところで，相模川流域における環濠集落群の構成上の問題としては，西方遺跡のような，鶴見川・早渕川流域の折本西原遺跡に匹敵する大規模環濠集落の存在にも，注目しておく必要がある。相模川流域の環濠集落は，今のところ金目川流域と目久尻川・小出川流域にまとまる傾向を見せているが，これを鶴見川・早渕川流域と対比させた場合，これらの集落が，折本西原遺跡のような大規模な環濠集落を中心とする，一つないしは複数の社会的まとまりを形成していた可能性は十分に考えられる。西方遺跡は，とりあえず東岸の中心集落の最有力候補ということになろうか。とすれば，そこには，東京湾沿岸地域を中心に発見例が増加している「集落内大形方形周溝墓」（安藤1996a）の存在を予測することも許されるであろう。

一方，西岸地域では，今のところ西方遺跡のような，大規模集落の存在は明確でない。ただし，筆者は，砂田台遺跡の6号方形周溝墓・7号方形周溝墓の集落内におけるあり方が，この点を考察する上で無視し得ないものと考えている。両者とも一辺17～18mとやや小振りであるものの，それでも一般のものより大形の周溝墓が，集団墓から離れて集落内に存在する点では，「集落内大形方形周溝墓」と共通した特徴を有しているとも言える。他地域の「集落内大形方形周溝墓」と同様の契機によって築かれた可能性も想定できる。であれば，傑出した集落規模を有するわけではないが，近辺の集落群を代表するような人物が，一時的であれ砂田台遺跡に

居住していたと推測することも不可能ではない。ただ，この点については，もう少し周辺集落の様相が明らかになった上で判断しても遅くはなかろう。

・集落群の終焉

鶴見川・早渕川流域における宮ノ台式期集落群は，十数ヶ所の環濠集落とそれを取り巻く多数の小規模集落の突然の廃絶，という劇的な変化とともに終焉を迎える。その直後には，宮ノ台式期の集落群の中心地であった，鶴見川・早渕川中流域から規模の大きな集落が消滅し，代わって上流部に朝光寺原式土器を主体とする集落が，そして鶴見川下流域・多摩川下流域に「久ヶ原式土器」（安藤1996bで言う「久ヶ原式土器」）主体の集落が形成されるようになる。それは，従来言われてきたような環濠集落の解体と集落の分散という単純な現象ではなく，2,000人を越えるであろう大規模な集団が，ほぼ同時に移動したことを示しているのである。

データの不足は否めないものの，筆者は，相模川流域においても概ね同様の集落の終焉を迎えたものと推測している。例えば，集落の大半を調査した砂田台遺跡では，SaⅥ期を最後に集落が廃絶され，その後古墳時代初頭に至るまで人間の活動の痕跡は見られなくなる。また，大規模な環濠集落である西方遺跡においても，「後期」（とりあえず本稿では宮ノ台式期と五領式期の間の時期を「後期」としておく）の遺物の存在が明確ではなくなるのである。

ただし，「後期」の大規模集落の存在が明らかになっている，根丸島遺跡や原口遺跡，宮の里遺跡，倉見才戸遺跡などでは，宮ノ台式期から「後期」への集落の継続を考えられなくもない。しかし，ここで問題となるのは，相模川流域において，宮ノ台式期の系譜を引くか，あるいは時期的に宮ノ台式土器に直続する土器が，現在までのところほとんど明らかにされていないことであろう。これまでの土器編年の研究成果を見る限り，相模川流域の「後期」集落の大半は，「後期」中葉以降に成立したと考えざるを得なくなるのであり（西相模考古学会1987，立花1991，西川1991），仮にこの点を認めるならば，やはり宮ノ台式期の集落群は，宮ノ台式期の終焉とともに，集団移住というかたちで廃絶されていた可能性が高くなるのである。

もちろん，現在の土器編年のどこかに盲点があり，すでに我々の眼前に宮ノ台式土器に直続する土器が存在している可能性もないわけではない。特に，数百軒に達する弥生時代の住居址が検出された根丸島遺跡などは，この問題を追求する上できわめて興味深い遺跡である。南関東地方の弥生時代「後期」の土器編年が，混迷の状況を抜けきったとは言えないこと，そして一方で宮ノ台式土器の終末が，東海地方以西の弥生時代後期にずれ込む可能性が指摘されている点（宍戸1992）などを鑑みれば，今後この土器編年上の隙間を一気に埋める説得力の高い解釈が登場することも十分に考えられるはずである。

しかし，その可能性を念頭に置いたにせよ，現状の土器編年の細かなレベルにおいても，宮ノ台式期に直続する時期の資料が見えてこない点には，それなりの評価をしていいようにも思われる。東京湾沿岸地域の「久ヶ原式土器」は，現状で宮ノ台式土器との系統的連続性が確認されている唯一の土器型式であるが，相模川流域に客体的に混在する「久ヶ原式土器」を見て

も，今のところ確実に「久ヶ原式」期初頭に遡るものは確認できない。相模川流域の弥生時代「後期」の土器が，駿河湾周辺の登呂・飯田式土器，東遠江の菊川式土器，西遠江・東三河の伊場式・寄道式土器といった，他地域の系譜を引くものが主体となる以上，型式学的に宮ノ台式土器との接点を認めにくくなることは当然かも知れない。しかし，資料が増加した今日においても，宮ノ台式土器の系譜を留めるものがほとんど確認できないこと，そして客体的とは言え，宮ノ台式土器との系統関係が明確な「久ヶ原式土器」の変遷観からも，宮ノ台式期に直続する土器の存在を想定できないことの持つ意味は，決して小さくないはずである。したがってここでは，今後修正を余儀なくされることを覚悟の上で，相模川流域の宮ノ台式期の集落群が，宮ノ台式期の終焉とともに一時期に廃絶されたとする解釈をとってみたいと思う。

そうなると，集団の移住先が次の問題として浮かび上がってくることになろうが，この点については，正直なところ未だ有効な解釈の方向性を見出し得ないでいる。鶴見川・早渕川流域の場合は，宮ノ台式期集落群の廃絶とともに，隣接する多摩川・鶴見川下流域に久ヶ原遺跡をはじめとする大規模な集落の出現が認められ，鶴見川・早渕川流域の集団が多摩川・鶴見川下流域へと移住した可能性が考えられた（安藤1991b）。しかし，相模川流域の場合は，流域内及び近隣に「後期」初頭の集落群の存在が確認されているわけではなく，相模川流域から離れた地域にその移住先を求めざるを得なくなってしまうのである。

もとより土器編年に大きな問題を抱えた上での仮想的な議論だけに，これ以上の推測は控えるべきかも知れないが，一方で，上記のような大規模な集団移動の可能性をはなから否定してかかることにも問題はあろう。一般に土地への定着性が高い農耕社会の研究においては，研究者の視点が，特定地域内の遺跡群の変遷を継続的に捉える方向に進む傾向が強くなる。そしてその傾向は，従来の弥生時代の集落研究にも顕著であった。もちろん，土地に永続的な価値を与える水田の造営によって，集落・集落群が特定の土地への定着性を強めるとの一般論を否定するつもりはないが，鶴見川・早渕川流域の集落群の廃絶に見られるように，弥生時代においては，時として集団全体がそれまでの生活の基盤を捨て去り，他地域に移動するという現象が生じていたことにも目を向ける必要があるように思われる。そして仮に相模川流域の宮ノ台式期の集落群の廃絶にも，鶴見川・早淵川流域と同様の集団全体の移動が想定できるのであれば，少なくともそれは，一部の地域の特異な現象として片付けることはできなくなる。未発見の遺跡に問題の解決を期するだけでなく，過去を見る自らの視点の再検討へと進んでみるのも一案ではなかろうか。

ところで，宮ノ台式期から「後期」にかけては，他にも土器，集落群構成，墓制，石器などの様々な側面に及ぶ大きな変化が生じていることが指摘されている（松本1988）。例えばその一つとして，この時期の土器の変化を取り上げれば，上総地域の宮ノ台式土器の系統を引く「久ヶ原式土器」が，東京湾沿岸に濃密な分布を見せるようになる一方で，その周辺に，朝光寺原式土器・岩鼻式土器・臼井南式土器などの宮ノ台式土器の系譜を引かない土器型式が多数

出現する。武蔵野台地北半でも，東遠江の菊川式土器を主体的に出土する遺跡が，すでにこの時期に出現していた可能性があるという（早稲田大学校地埋蔵文化財調査室1996)。

また，この時期の変化として筆者が特に注目しているのは，石製利器類の消滅である。もちろん「後期」にも磨製石斧類は僅かに残存する。しかし「後期」の住居址の検出数が宮ノ台式期の数倍～十倍に達していることを考慮すれば，僅かに残るとは言え，もはやそれが消滅と表現できる程度にまで減少していたことは間違いない。筆者は，大陸系磨製石斧類が数多く見られる宮ノ台式期においても，すでに利器の鉄器化がかなり進んでいたことを想定しているが(安藤1997)，「後期」の石製利器類の消滅は，さらに鉄器の普及が進み，ほぼ利器の鉄器化が完了したことを物語るものと考えている。また宮ノ台式期の大陸系磨製石斧類は，時期が新しくなるにつれ増加する傾向が顕著であり，筆者はそこに当時の鉄器の供給量と人口増加との間のずれを想定した。とすれば，「後期」には，このずれを短期間のうちに解消し，利器の鉄器化を完了させるような，新しい鉄器の供給関係が成立していたことになる。

筆者は，上記の変化を含めた，この時期の複数の変化が，それぞれ何の繋がりもなく別々の要因によって生じていたとは考えていない。やはりこれらの変化は，この時期に生じた大きな変化の幾つかの側面と見るべきであろう。宮ノ台式期の集落群の突如とした廃絶と大規模な集団の移動，宮ノ台式土器の系統を引く「久ヶ原式土器」の東京湾沿岸への集中，その周辺に成立する異系統の土器型式群と東遠江菊川式土器の流入，そして利器の鉄器化を一気に完了させる鉄器の供給関係の成立。これらの諸変化を相互に関連したものとして全体的に眺めると，そこには宮ノ台式期の集団間・地域間の交流関係を大きく組み替えた，新たな関係の成立が見えてくるように思えるのである。

先述のように，宮ノ台式期には，集団間・地域間の相互依存的・対立的な関係が成立していたと考えられる。そして，石器組成の細かな地域差や，そこから予測される鉄器の普及率の差などを考慮すると，宮ノ台式期の物資の流れには，近接した集団・地域を数珠のように繋ぐ交流関係が大きな意味を持っていたと推測される（安藤1997)。このような数珠繋ぎの交流関係は，宮ノ台式土器の地域差の現れ方が，地理的な距離と相関しているように見えることからも窺うことができた（安藤1996b)。

一方「後期」の集団間・地域間には，このような数珠繋ぎの交流関係とは別に，遠隔地との間を直接的あるいは飛び石的に結ぶような交流関係が成立していた可能性が高いように思われる。そして，この時期に，一気に利器の鉄器化が完了することを重視すれば，その交流関係が鉄器の供給と無関係であったとは，やはり考えにくい。鉄器の供給を中心とした遠隔地との交流関係の成立は，それまでの石器・鉄器の流通ルートであった，数珠繋ぎの集団間・地域間の交流関係を寸断することになる。そしてその周辺には，交流の結節点を核とする新たな交流関係が形成されるはずである。それは，結節点と周辺地域の人口比にも影響を与えることが予測されよう。こうして「後期」には，宮ノ台式期とは大きく異なった物・人・情報の流れる道が

形成されていったのである。

「久ヶ原式土器」の東京湾沿岸地域への集中，周辺地域における宮ノ台式期集落の廃絶と宮ノ台式土器の系譜の断絶，そして「久ヶ原式土器」の周囲に衛星的に分布する異系統の土器群の成立は，このような観点から説明することはできないだろうか。さらに，松本　完氏の指摘通り，武蔵野台地北東部への菊川式土器の流入が「後期」初頭にまで遡るのであれば（早稲田大学校地埋蔵文化財調査室1996），それこそまさに上記のような飛び石的な交流関係の成立と深く関わる現象と考えることもできるだろう。

土器編年という足下がおぼつかない状況で，推測に推測を重ねた解釈に説得力があるとは思えないが，いずれにしても，宮ノ台式期から「後期」にかけての大きな変化が，相模川流域あるいは南関東地方といった狭いエリアの中だけで説明のつくものでないことは間違いなさそうである。特に，遠隔地との飛び石的な交流関係や，鉄器の供給量の急増を問題とするのであれば，そこでは日本列島各地の動向のみならず，大陸をも睨んだ広い視野が必要になることを，蛇足ではあるが付け加えておきたい。

4．おわりに

以上，相模川流域における宮ノ台式期集落の展開過程を素描し，集落群の構成やその形成・展開・終焉といった問題に若干の考察を加えてみたが，どうやら明らかにし得た点以上に，多くの課題・問題が残される結果となったようである。

その一因には，確かに相模川流域の資料の少なさが影を落としていることは否定できない。もちろん冒頭で述べたように，相模川流域の宮ノ台式期の資料は，近年着実に増加しつつある。しかし，そうは言っても，相模川流域の発掘調査密度が，鶴見川・早渕川流域に比して未だ桁違いに低いレベルにあることもまた事実である。相模川流域には，まだまだ未発見の遺跡が数多く眠っているはずであり，今後も重要な発見が続くことは間違いない。したがって，本稿で想定した集落群の動態が，今後の調査の進展によって大きく変更されることも覚悟しているつもりであるし，それを期待している節もある。その意味では，これからの資料の増加が，課題の追求に重要な意味を持ってくることは間違いないのである。

しかし，本稿を通じて，多くの課題が浮かび上がってきた理由は，それだけではないと思っている。本稿では，相模川流域の集落群動態を鶴見川・早渕川流域のそれと対比し，両者の間に見られる共通点・相違点をまとめることを出発点として，宮ノ台式期とその前後に南関東地方全体で生じた，土器・石器・鉄器をはじめ集落形態や集落群構成にいたるまでの様々な変化を，広い視野から全体的に把握する方向性を模索してみたつもりである。それが本稿において十分に功を奏したかどうか，今一つ自信の持てないところではあるが，少なくとも，このような南関東地方を取り巻く広い地域を視野に入れた分析が，今後の宮ノ台式期の研究において不

可欠になってくることだけは間違いないものと確信している。こうした視点・枠組みの変化は，当然新たな問題点の認識へと繋がり，我々は，こうした問題に導かれて新たな思索を巡らすことになる。本稿において多くの課題が残されたことについても，ひとまずはこのように評価しておきたいと思っている。

新たな資料の発見や，研究の視点・枠組みの変更が，我々の歴史の解釈に修正を迫るという過程自体は，考古学が学問としての歩みを続ける以上，永久に続くことである。その意味では，資料の蓄積の度合いがあくまで相対的な問題であることを，我々はもう少し認識する必要があるのではなかろうか。今，筆者が相模川流域を取り上げてみようと思った理由の一つはそこにある。重要なことは，ある課題を眼前にして，資料の蓄積を待ち続けることではなく，与えられた条件の中で，問題を解くための手がかりを見出す努力を続けることであろう。もちろん，資料が少なければ，研究の動機付け自体が減少することになるだろうし，資料的制約が厳しければ厳しいだけ，解釈において，我々の歴史観や理論，あるいは先入観・偏見といったものが作用する度合いが大きくなることも確かである。しかし，だからと言って，その思考の過程を一概に無意味なものと否定することはできない。何故なら，新たな発見や，分析視点・枠組みの切磋琢磨を通じて，“合理的”説明の背後に潜む我々の思考の偏向性に僅かでも気づき，それを内省的に見つめ直す機会が与えられるのならば，そこに考古学研究の現実的な役割の一つを見ることができるからである。

本稿を草するにあたり，伊丹　徹・大島慎一・河合英夫・宍戸信悟・曽根博明・立花　実・西川修一・林原利明の各氏には，文献や情報の提供をはじめ，本稿の内容に関する相談にも乗っていただいた。文末ながら記して謝意を表したい。

引用・参考文献

愛甲宮前遺跡第2地区発掘調査団　1994『愛甲宮前遺跡第2地区』

愛名鳥山遺跡発掘調査会　1974『愛名鳥山』

浅川利一・他　1988「厚木市宮の里遺跡の調査」『第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』第12回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会

厚木市　1985『厚木市史　地形地質編・原始編』

厚木市教育委員会　1978・1983・1990『子ノ神Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』

綾瀬市教育委員会　1992『神崎遺跡発掘調査報告書』

安藤広道　1991a「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』唐古整理室ＯＢ会

安藤広道　1991b「弥生時代集落群の動態―横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代集落群を中心に―」『調査研究集録』第8冊　横浜市埋蔵文化財センター

安藤広道　1992「三殿台遺跡の再検討―弥生時代中期の遺構群を対象として―」『調査研究集録』第9冊　㈶横浜市ふるさと歴史財団

安藤広道　1995「人口論的視点による集落群研究の可能性―先史時代の人口増加率の推定と集落群研究

への応用をめぐって―」『弥生文化博物館研究報告』第４集　大阪府立弥生文化博物館
安藤広道　1996a　「大形方形周溝墓から見た南関東弥生時代中期社会」『みずほ』第18号 大和弥生文化の会
安藤広道　1996b　「南関東地方における「台付甕形土器」の展開」『鍋と甕　そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム
安藤広道　1997　「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第２号
飯塚美保　1996　「宮ノ台式土器における台付甕形土器の成立」『神奈川考古』第32号　神奈川考古同人会
石川日出志　1994　「東日本の大陸系磨製石器―木工具と穂摘み具―」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会
伊藤淳史　1996　「太平洋沿岸における弥生文化の展開―駿河湾岸中期弥生土器からの検討―」『ＹＡＹ弥生土器を語る会20回到達記念論文集』弥生土器を語る会
大村浩司　1989　「下寺尾七堂伽藍跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告31』神奈川県教育委員会
岡本孝之　1987　「神奈川県古代開発史（予察）」『神奈川考古』第23号　神奈川考古同人会
押方みはる　1996　「本郷中谷津遺跡有馬小学校地内Ⅰ・Ⅱ区」『神奈川県埋蔵文化財調査報告38』神奈川県教育委員会
小田原市教育委員会　1997　『中里第Ⅲ地点発掘調査報告書』（小田原市文化財調査報告書第61集）
神奈川県　1979　『神奈川県史　資料編20　考古資料』神奈川県県民部県史編集室
神奈川県教育委員会　1988　『神奈川県文化財調査報告書　第47集　厚木市山ノ上遺跡Ⅰ』
神奈川県考古学会　1997『かながわの弥生時代の社会―後期の環濠集落から考える―』平成８年度考古学講座
神奈川県立博物館　1969　『神奈川県考古資料集成１―弥生式土器―』
神奈川県立埋蔵文化財センター　1988　『宮久保遺跡Ⅱ』（神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15）
神奈川県立埋蔵文化財センター　1989・1991　『砂田台遺跡Ⅰ・Ⅱ』（神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20）
㈶かながわ考古学財団　1997a　『原口遺跡Ⅰ　第１分冊』（かながわ考古学財団調査報告22）
㈶かながわ考古学財団　1997b　『吉岡遺跡群の発掘成果から』
㈶君津郡市文化財センター　1995　『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』（㈶君津郡市文化財センター発掘調査報告書第103集）
君津市教育委員会　1996　『常代遺跡群』
木村勇・田村良照　1992　「寒川町倉見日本鉱業㈱新ひかり社宅内遺跡」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会
黒沢　浩　1994　「宮ノ台式土器の成立―東海地方の櫛描文土器群の動向から―」『駿台史学』第89号
国分尼寺北方遺跡調査団　1996　『国分尼寺北方遺跡―第７次・第８次調査―』
小島弘義　1985　「寄贈された弥生式土器」『平塚市文化財調査報告書』第20集　平塚市教育委員会
迫　和幸　1996　「温水長久保地区遺跡群第１地区」『神奈川県埋蔵文化財調査報告38』神奈川県教育委員会
真田・北金目遺跡調査団　1983　『真田・北金目』
宍戸信悟　1992　「南関東における宮ノ台期弥生文化の発展―特に西相模を中心として―」『神奈川考古』第28号　神奈川考古同人会
田尾誠敏　1992　「真田城跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告34』神奈川県教育委員会
高橋勝広　1993　「宮ノ根遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告35』神奈川県教育委員会
立花　実　1991　「相模における後期弥生土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』　第８回東海埋蔵文化財研究会浜松大会
立花　実　1992　「高森・赤坂遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告34』神奈川県教育委員会

立花　実　1995 「石田・峯遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告37』神奈川県教育委員会
谷口　肇　1996 「神奈川県地域（弥生前期～中期中葉）」『ＹＡＹ　弥生土器を語る会20回記念論文集』弥生土器を語る会
田村館跡発掘調査団　1995 『田村館跡』
茅ヶ崎市　1980 『茅ヶ崎市史３　考古・民俗編』
茅ヶ崎市教育委員会　1994 『下寺尾西方Ａ遺跡』（茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告７）
茅ヶ崎市教育委員会　1995 「茅ヶ崎・居村Ａ遺跡第３次調査」『平成６年度　茅ヶ崎の社会教育』
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会　1988a 『下寺尾西方Ａ遺跡』（茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告１）
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会　1988b 『下寺尾西方Ｃ遺跡』（茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告２）
東海大学文学部・東海大学校地内遺跡調査団　1991 『足もとに眠る歴史　西相模の三・四世紀』
富永富士雄　1995 「茅ヶ崎・居村Ａ遺跡第３次調査」『第６回茅ヶ崎市遺跡調査発表会』茅ヶ崎市教育委員会
富永富士雄　1997 「宿遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告39』神奈川県教育委員会
豊田本郷遺跡発掘調査団　1985 『豊田本郷』
中村喜代重　1992 「伊勢原市石田・細谷遺跡」『第16回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会
中村喜代重　1997 「厚木市宮の前舟子遺跡」『第21回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』神奈川県考古学会
西川修一　1991 「相模弥生時代後期社会の研究」『古代探叢Ⅲ』早稲田大学出版部
西相模考古学会　1987 『西相模の土器（本文編）―弥生時代から古墳時代前期―』
西相模考古学会　1988 『西相模の土器（資料編）―弥生時代から古墳時代前期―』
根丸島遺跡調査団　1976 『根丸島遺跡―第一次・第二次発掘調査概報―』
秦野市　1985 『秦野市史　別巻考古編』ぎょうせい
林原利明　1996 「愛甲宿遺跡第２地区」『神奈川県埋蔵文化財調査報告38』神奈川県教育委員会
比田井克仁　1991 「西相模の弥生後期から古墳前期の土器様相」『足もとに眠る歴史　西相模の三・四世紀』東海大学文学部・東海大学校地内遺跡調査団
平塚市遺跡調査会　1989a 『大原遺跡Ⅲ』（平塚市埋蔵文化財シリーズ10）
平塚市遺跡調査会　1989b 『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書２』
平塚市遺跡調査会　1992 「南原Ｂ遺跡隣接地」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書５』
平塚市遺跡調査会　1993a 「南原Ｂ遺跡第５地点」『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書６』
平塚市遺跡調査会　1993b 「南原Ｂ遺跡第２地点」『山王Ｂ・稲荷前Ａ遺跡他』（平塚市埋蔵文化財シリーズ23）
平塚市遺跡調査会　1996 『南原Ｂ遺跡他』（平塚市埋蔵文化財シリーズ29）
平塚市博物館　1980 『砂丘上の遺跡確認調査報告』（平塚市博物館資料№22）
平塚市博物館　1986 『王子台遺跡発掘調査報告書』（平塚市博物館資料№６）
平塚市博物館　1988 『相模川流域の弥生時代』
平塚市博物館　1989 『赤坂遺跡発掘調査報告書』（平塚市博物館資料№36）
本郷遺跡調査団　1995 『海老名本郷　Ｘ－４』
本郷中谷津遺跡調査団　1994 『本郷中谷津遺跡』
松本　完　1988 「南関東地方における中期環濠集落の終焉前後」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』Ⅱ　埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
早稲田大学校地埋蔵文化財調査室　1996 『下戸塚遺跡の調査　第２部　弥生時代から古墳時代前期』